

父母と学ぶ会だより

NO. 31 研修報告号～H29年2月発行

施設内研修報告①

H28年10月24日(月)

発表者 平井勝 鈴木美由起

人と接するうえで自分の性格を知っておこう

参考図書

75.5%の人が
性格を変えて
成功できる
心理学×統計学「ディグラム性格診断」が
明かす〈あなたの真実〉
木原誠太郎+ディグラム・ラボ

講談社

今回、「人と接するうえで自分の性格を知っておこう」というテーマで施設内研修を行いました。この研修では、ディグラム診断という性格診断テストを行いました。ディグラム診断とは、エゴグラムという性格診断方法とアンケートデータを合わせた「心理学+統計学」による性格診断方法です。20個の質問に答え、各質問に点数をつけグラフ化します。グラフは全部で27種類あります。点数をつける項目には、厳しさや優しさなど5つの項目があります。

テストを採点すると、各項目の数値の高低が分かります。この項目は日々の生活の行動により変動させることが出来ます。例えば、厳しさの項目を下げたいとしたら、それに応じた行動を続けていけばいいのです。

性格を変えたいと思う人も多いでしょう。このテストでその可能性を知ることができたので、日々の生活に取り入れたいと思います。
(文責 平井 勝)

職員の感想

- 自分の性格を変えられるなら、変えていきたい。
- プライベートと仕事では回答が変わると思った。
- 自分のことを分析できて良かった。



H28年11月15日(火) 発表者 林祐太 長谷川直人 鈴木佳子

施設内研修報告②

チームゆいまあるを確立するためのコミュニケーション、 支援者の共通理解・情報共有の形を探る

今回の施設内研修では、各グループのことで聞きたいことを各グループの支援者に書き出してもらいました。理由としては、年末(平成27年)に行った自己評価表(支援者が毎年書いているもの)の中で、グループ間の共通理解や情報共有が不足しているとの意見が多く、その内容も日常の支援や活動内容などが挙げられていたので、これを機に疑問が少しでも解消できれば良いなと考えました。実際に各グループに対して聞きたいことを書き出してもらい、その聞きたいことに対して各グループに答えてもらいました。聞きたいことの一部として、行動のペースが違う利用者さんへの支援の方法、グループ内で支援者の意見が分かれた時の対応方法、多動がある方の休み時間の過ごし方、保護者との情報を共有していく方法などが挙げられました。研修自体は書き出された疑問に答えていくという単調なものになりましたが、大切なことは、共通理解・情報共有するためのコミュニケーションの継続だと思えます。研修で終わらずに、疑問に思ったことはその都度、解決できたらいいなと思えます。
(文責 林 祐太)

研修報告①

強度行動障害支援者養成研修（基礎研修）

講師 静岡県発達障害者支援センター 岡田 祐輔 氏 他5名

平成 28 年 11 月 29 日、30 日に強度行動障害支援者養成研修に参加しました。この研修では障害を持った方達がどのような気持ちで生活しているのかを演習を行って学んでいくというものでした。

まず、感覚はどんなものかを知るために、軍手をしっかりとめられない状態で折り紙を折ることをやりました。実際にやってみると、指が思うように動かないので折りづらかったです。また、30 秒でつるを折るという条件があったので焦って折るのも雑になってしまいました。日々の自分の支援で利用者が何かをする時に焦らせていないか反省することが出来ました。感覚の不自由さをもっと理解しなければと思いました。

次に知らない言葉で話をされたらどんな気持ちになるかを体験しました。相手に伝えようとしていることが分からないので意思の疎通に苦労しました。相手のジェスチャーを頼りに理解していかなければならず、もどかしい気持ちになりました。自分が伝えたいことが利用者の知らないことだったらどんな気持ちになるか体験することが出来ました。言葉を使って伝えることが難しい方は自分の気持ちが上手く伝わらないときは大きなストレスになっていると感じました。（文責 溝口 諒）



強度行動障害の捉え方 「冰山モデル」
ストレス・不安・苦痛などが自閉症の特性によりうまく伝えられず、いわゆる問題行動として現れる。

研修報告②

H28年12月6日（火）、7日（水）

強度行動障害支援者養成研修（実践研修）

講師 NPO 法人 地域生活応援団あくしす 長谷川 行信 氏 他5名

今回、強度行動障害支援者養成研修（実践研修）を受けました。強度行動障害の人の多くは、自閉症を有しています。そのため自閉症の特性を理解しなければなりません。自閉症の人は、独特なコミュニケーションを取ったり、先の見通しを持ってない等の特性があります。その特性に配慮した生活ができないと、自傷・他害等のいわゆる問題行動を引き起こす可能性があります。

この研修では、事例に基づき支援計画や行動援護の手順書を作成しました。作成するときには、それぞれの人が持つ「強み」に注目することが大切です。視覚からの情報に強いとか、タイマーで行動を切り替えられる等出来ないことではなく、出来ることに着目して支援をしていく必要があります。

この研修では昨年受けた研修よりさらにステップアップしていて、難しい場面が多く戸惑うこともありましたが、この研修で学んだことを活かしていきたいと思います。（文責 平井 勝）